

Marcella における密猟の意味

玉 崎 紀 子

Mrs. Humphry Ward は 1888 年 *Robert Elsmere* という記録的なベストセラーで文壇に登場し、その後も評判作を次々と発表し、当時は ‘another Shakespeare’ ではないのだと Phelps¹⁾ に言わしめたほどの人気作家であった。その高い人気は大衆小説家的といえるが、その作品は決して卑俗、煽情的とはいえず、子女に安心して読ませられるというヴィクトリア朝小説の伝統に沿うものであった。その上、教育的意図により知的理論を混じえた独特の小説といえる。発表前の *Robert Elsmere* の原稿を見せた友人に「大変興味深いが、こういう難しい信仰の問題に一般読者は果して興味があるだろうか。」と言われ、Mrs. Ward は驚きあきれ、「だけこの世にこれほど興味深いものは他に何もありませんよ。」と熱意と確信をもって語ったという逸話²⁾から推しはかれるように、Mrs. Ward は知的環境に完全につかって生きた人物であった。

ヴィクトリア朝の特質を代表する第 1 の名家といってよい Arnold 家³⁾にラグビー校長の Dr. Arnold の孫として、詩人 Matthew Arnold の姪として生まれた彼女は「教養ある精神と良心、学問上の貴族的家柄、宗教・倫理的行為、公共の任務への献身といった中流階級の理想を体現する」⁴⁾一員であり、しかも有名な二人の Arnolds と比べると、創造的な思想家、芸術家としては劣るが、高い知性を受けつぎ、さらに母方から熱烈な道徳的確信を受け継ぎ⁵⁾、二人の成し遂げ得なかった実際的な社会改革を行った。⁶⁾ 今日、小説としては議論・理念が多すぎるのではと思われる彼女の問題小説は、このような作者だからこそ把握できた主題を理路整然と語り、ヴィクトリア朝読者に深い知的満足を与えた。

この特徴は *Robert Elsmere* の宗教・信仰問題から社会改革に焦点を移

した作品においても同様に顕著である。ここにとりあげる 1894 年刊行の *Marcella* は禁猟区問題について訴える社会小説といえよう。

産業革命による貧しい労働者、資本家の搾取、人間性を失わせる労働、中流の「自助」の思想を問題にした 19 世紀中葉の社会小説とはちがって、Mrs. Ward は Trollope と並ぶ写実的なヴィクトリア朝社会の風俗描写により、1880 年代にロンドンに新しく出現したイースト・エンドの貧民⁷⁾、厳しい農業不況を描き、これまで安閑としてきた地主階級の自覚と意識変革をせまり、20 世紀を予兆させる社会小説にしている。

ここでは、まず密猟事件の背景を Mrs. Ward の娘婿である G.M. Trevelyan の『英国史』に照らし合わせつつ検討し、次に密猟事件の投影するヒロインの三角関係と密猟をからみ合わせ解釈することによって、狩猟法廃止の訴えはもちろん重要であるがそれだけでなく、英国小説の伝統に沿った作品の完成度の故に注目すべきであることを論じてみたい。

(一)

E. M. G. Smith は Mrs. Ward の作品を宗教・社会改革・ロマンス・戦争物と 4 つの分野に分けており⁸⁾、これに従えば *Marcella* は主として中期に書かれた社会改革小説の代表であるが、ただ単にそれに留まらず、構成の点でも人物像でも円熟した力量が示され、しかも後期の大衆小説的ロマンスの欠陥はまぬかれていて、全作品 24 篇の中でも最も秀れたものの 1 つであると思われる。

常に高い人気を持った Mrs. Ward にとってさえも *Marcella* の発行は作家生活における最高に幸福な日であった⁹⁾という発言から明らかなように、作品は圧倒的好評で迎えられ 2 年後に続篇 *Sir George Tressady* (1896) が出版されたほどであったが、それはヴィクトリア朝読者が常に求める精神的向上にむかって努力する魅力的なヒロインという普遍的な物語をもっていたからに他ならない。

もちろんその中心的主題は狩猟法の改革であるが、それにからんで変革をせまられる地主階級、国会での地主階級以外の議員増大、労働党の萌芽、

小作農民の選挙権，農業不況による困窮と貧民のロンドン流出，新しい婦人の職業としての看護婦，ラファエロ前派とファビアン協会などさまざまな社会背景が描かれ，世紀末の激変の時代¹⁰⁾の諸問題を浮かびあがらせ，作品を迫力あるものにしている。又，時代の変化に応じた新しい視点を紹介し訴える新しい女性を，ヒロインとする現代的な特徴をもつ。

この作品のヒントとなった事件は Mrs. Ward の country house, Stocks の近くで 1891 年 12 月に起ったもので，近隣の地主の使用人の 2 人の猟番が，密猟者達に殺され，減刑請願にもかかわらず密猟者達は処刑されたというものであった。*Marcella* 執筆の頃，この種の密猟事件は非常に多く¹¹⁾，それが作品中でも言及されている。¹²⁾ しかし狩猟法は廃止されるべきとはっきり訴えている点にこの小説の特徴があり，さらに，地主階級に対して戦う，弱い貧しい人々に共鳴して社会に激しい怒りを燃えあがらせる地主の娘 Marcella を代弁者とすることによって内部事情を知った上での批判となり，その訴えを真実味のある社会改革小説として効果的なものになっている。

物語中の密猟事件は，ヒロインの父 Mr. Richard Boyce の地所 Mellor Park の農場労働者 Jim Hurd が，Mellor Park に隣接する Maxwell Court の猟場で密猟中，かねて仇敵の間柄である Court の猟番 Westall にみつかり，怒り罵しられ，Hurd は発作的に発砲し，Westall を殺してしまう。これを法に照らして殺人とする Lord Maxwell と Aldous に対し，Marcella は地主階級の狩猟の楽しみのために猟場を禁猟とし，飢えている農民の密猟を罰するのは許せない，Westall という憎むべき男からこれまでうけた Hurd の苦しみを考えると彼に哀れみをもつべきで，殺人ではなく正当防衛として罪を許すべきと訴える。

実際 Hurd が密猟においやられる背景は，地主階級の専横による農民の悲惨な生活，さらに政府の無為無策を反映している。

Low wages, the burden of quick-coming children, the bad sanitary conditions of their wretched cottage, and poor health,

had made their lives one long and sordid struggle. But for years he had borne his load with extraordinary patience. He and his could just exist, . . . (p. 93)

Hurd の貧しい生活は、地主 Boyce が低賃金で働かせしかも不況時には小作農に仕事を与えない (p.39)¹³ という慣習的手段で金をうかせ帳尽を合わせる当時の地主に一般的な農業経営を行なうことから生じている。しかも作品中で Lord Maxwell の年収は 30,000 ポンド¹⁴と言及され、Mr. Boyce は年収 4,000 ポンドに持ちなおしたところで、Marcella に遺して死ぬ。それに対し激しい肉体労働によって農場労働者は週給 12 シリング (p. 39) (年 30 ポンド位) で、それも冬の半年間は仕事がなく、年 15 ポンドになるといった貧富の差があった。ヴィクトリア朝においてはまあまあの中流生活を行える年収は 400 ポンド¹⁵であったというので、年 20 ポンド足らずで Hurd が妻と 3 人の子を養うのは確かに starvation wages (p.85) であった。子たくさんはヴィクトリア朝を通じての悩みであったが、1877 年、Mrs. Annie Besant に対する告発が、産児制限の方法を初めて一般庶民に知らせることになったという状況であるので¹⁶、Jim Hurd にとっては無知なまま 3 人の子供は当然 the burden of quick-coming children となるだけであった。

このようにして増えた人口をヴィクトリア朝政府は、移民として国外へアメリカへ、植民地へと送ることでのいでいたが、この姿勢を反映して農民はいとも安易に村を捨てることになった。農民は仕事がないと町へ、国外へと出ていったが、これを行政側は農業には失業問題がないからと放置し、農政を地主側の都合にまかせていた。¹⁷そして大不況の間、農業の転換を無視し、とり返しのつかぬ状態をまねいたのであった。

1890 年代には町では現代とほぼ同じような水の供給、下水排水施設、ガス灯などは当然のものとして住居設備が急速に改善されていったのに¹⁸、田園地帯では地主の金次第であったので農民の家の水の供給設備改善を Boyce に Harden 牧師が頼んでいる (p.20) が、Boyce には改良する気が

ない。水と同じく衛生設備も Boyce の地所では放置されていたことが明らかである。こういう Hurd の家は疑いもなく wretched cottage であった。この状況にさらに不況が追いうちをかけた。

Till that last awful winter! — the winter before Richard Boyce's succession to Mellor — when the farmers had been mostly ruined, and half the able-bodied men of Mellor had tramped 'up into the smoke,' as the village put it, in search of London work — then, out of actual sheer starvation — that very rare excuse of the poacher! — Hurd had gone one night and snared a hare on the Mellor land. Would the wife and mother ever forget the pure animal satisfaction of that meal, or the fearful joy of the next night, when he got three shillings from a local publican for a hare and two rabbits? (p. 93)

この作品は、1875～84年の第1次農業不況とそれに続く時代を背景にしていると思われるが¹⁹⁾、不作のあと自由貿易の弊害から貧しい人々は大不況に苦しめられ、農民はやっと生きるだけの生活もできなくなり、ロンドンへ逃げ出し、せむしでやむをえず残った Hurd は密猟に走らざるを得なかったのである。²⁰⁾

初めての密猟の翌日村のパブの主人から 'a hare and two rabbits' の報酬として3シリング得たと描かれるが、これは密猟が半ば公然と認められていた時代背景を示す。この頃農民はどん底の暮らしにあえいでいたのに、富裕な人々は増えていて、上流地主階級の慣習にならって「きじ」をコースに入れたぜいたくな正餐を供していた。禁猟区を持たない階級はきじの入手が不可能であるので、密猟の獲物が闇市で売買された。²¹⁾ この需要があって Hurd をやとうような職業的密猟者が出現し、パブの主人も密猟と知りながら買うのである。

さらに年収100ポンド以下の者は猟をできないという禁止令により²²⁾地主、その客たちそして地主の猟番だけが猟場の獲物を射つことができ、その行為は階級の特権の印とみなされていた。²³⁾ 従って密猟者と猟番の間に

は、血なまぐさい撃ちあいや争いがあった。この歴史的背景の上にさらに Westall と Hurd の個人的確執を忘れてはならない。Hurd は少年の頃 Westall の下で見張番をしていたがせむしのため迫害され耐え難くやめたほどであった。ちょうどその頃、現在 Hurd の妻である Minta を Westall と Hurd は共に争って Hurd が彼女を獲て結婚したことも Westall には Hurd を憎む原因となった。猟番長の職をねらっていて手柄をたてたい Westall は密猟者をぬけ目なくつけまわし、とりわけ残忍に Hurd を見張り密猟の現行犯で捕えてやると公言していた。(p.93) Hurd の方も密猟の方法を考えるのにも Westall をだしぬこうと熱を入れるし、Westall への憎しみをいうのをはばからなかった。(p.130) 狩猟が特権であった時代背景故猟番としての個人的任務を果たしていたのに過ぎないと後に Lord Maxwell は言うが、Westall は確かに憎むべき男として描かれている。

このように地主階級の責任といえる農業の衰退、不作、低賃金、飢え、子たくさん、住居環境の劣悪さによる妻子供の病²⁴⁾、これが不況によりさらに悪化して Hurd は密猟においやられていく。そして Westall との憎しみ、確執が発作的殺人行為を招くのである。つまり背景のさまざまな社会現象を考慮する時、Marcella のいう通り禁猟区は貧しい人々への不当な差別である。

Again Marcella's heart contracted with rage rather than pity. Such wrack and waste of human life, moral and physical! for what? For the protection of a hateful sport which demoralised the rich and their agents, no less than it tempted and provoked the poor! (p. 234)

地主階級が猟という楽しみのために禁猟区を持ち、飢えのための密猟する農民を罰する。しかも裁判する判事は地主である (p.227) という Marcella の指摘は制度の欠陥を明らかにする。猟場がある以上、貧しい人は誘惑されるし、そのあげくに生命をすてることになる。これは、確かに地主の合法化された利己主義である。故に裁きではなくあわれみをと

Marcella の主張に偏見のない気高さを感じざるを得ない。

‘The whole point lies in this,’ she said, looking up: ‘*Can* we believe Hurd’s own story? There is no evidence to corroborate it. I grant that — the judge did not believe it — and there is the evidence of hatred. But is it not possible and conceivable all the same? He says that he did not go out with any thought whatever of killing Westall, but that when Westall came upon him with his stick up, threatening and abusing him, as he had done often before, in a fit of wild rage he shot at him. Surely, *surely* that is conceivable? There *is* — there *must* be a doubt; or, if it is murder, murder done in that way is quite, quite different from other kinds and degrees of murder.’ (p. 284)

さらに Marcella の Hurd への共感、あわれみはちょうど大好きな女中が死んだ時喪に服すかどうかの問題のようなもので、Marcella なら喪に服すだろうという Lady Winterbourn の言葉で (p.264), Marcella の下層階級に対する偏見のなさが知られる。又 Jim Hurd の言葉には証拠はないが正当防衛という Marcella の主張に、彼女と共に Hurd のことばを聞き、Westall の悪意を知る読者は、Westall の憎しみが誘発したのであって Hurd の故意ではないという Marcella に共感するので、この Hurd の死刑減刑請願を通じての禁猟区廃止は社会改革として訴えるものになる。

(二)

殺人罪で死刑と決った Hurd の減刑猶予請願にこの事件以前にすでに地主階級の権利に疑問を感じ狩猟法を攻撃すべきだと言っていた (p.154) Marcella は社会主義者としての立場から (p.105) 必死になる。しかし請願書に署名を求められた Lord Maxwell は断る。

‘My dear, I wish I could make you understand how gladly I would do this, or anything else, for you, if I honourably could. I would do it for your sake and for your grandfather’s sake. But

— this is a matter of conscience, of public duty, both for Aldous and myself. You will not surely *wish* even, that we should be governed in our relations to it by any private feeling or motive ?' (p. 283)

Marcella が女らしい深いあわれみの情をもち感情的に Hurd の赦しを願うのに対し、Lord Maxwell そして Aldous Raeburn は法と正義の問題として、殺人を犯した Hurd は罪の刑罰をうけるべきと理性的にとらえている対立がある。

しかも Marcella の理由も必ずしも公平といえない。Hurd が仕事も金もなく飢えのために密猟を犯した初期の段階なら許されもしようが、²⁵⁾ Marcella の手助けもあって the Court に仕事を得た後、しかもその仕事は密猟の目隠しに有益と考える事 (p.130)、密猟による興奮、技術を駆使して Westall を出しぬく喜びから止められない事、さらに密猟者の一味の手引きとして何度も密猟をしている事などは Marcella が、公平な眼で見ずに、禁猟区を持つ地主階級というだけで、Lord Maxwell や Aldous に不当な怒りをぶつけている、偏見から感情に走りすぎているという批判を抱かせる。

さらに Marcella は、passionate, passionately ということばで常に形容されるし、「たえず emotion の中に住んでいる」(p.288) という Marcella の母の言葉や、Lord Maxwell の private feeling (p.283) でなく良心、義務からという言葉は、Marcella があまりにヒステリックで感情過多で理性を無視しているのを明らかにする。請願の件でも心の底ではいつも最後には自分の思いどおりになると思いこんでいたこと (p.286)、魅力の故に甘やかされうぬぼれていること、他人の言葉など考慮せず、未熟な自分の考えを通そうとする、幼稚な利己主義の態度を持つことも明らかにされる。

そして Hurd 一家にのみ夢中で、Hurd の助命嘆願、Hurd の妻子の世話にあけくれているが、Hurd の被害者である Westall 未亡人には、Westall を憎み Westall 夫人に好意を持てないばかりに（その気持は読者に納得い

くよう描かれてはいるが）彼女を訪ねようとしないうという不公平な態度をとる。さらに Aldous が「それでは地主階級だから、私には意見の自由や良心を持つ権利がないのか」（p.305）と言うとき、Marcella が Hurd に同情を持つあまり、地主である Lord Maxwell や Aldous に極度に不公平な要求をしていることが明らかである。又「このような時に（Hurd の処刑前夜）果して Hurd 夫人は Marcella の同情を必要としているであろうか」（p.294）という Marcella の母の言葉、そして Hurd 夫人はその夜夫の肉身（p.298）だからと Ann Mullin に抱きつくという場面、さらには Marcella の社会主義について村人が「小さな慈善では何もならない、実質的なことを Boyce 氏がもっと考えてくれなければ」（p.81）と思うこと等から、Marcella が農民の気持になって考えていず、自分の社会主義の理想からのみ善意（社会主義）をおしつけており、社会主義が最高と思いこみ、ただその思いこみから怒りの感情にかられ、地主階級を批判しているのを読者は知る。これを死に際の Hallin は親友の Aldous に、次のように語る。

‘I often think,’ he said, ‘that she was extraordinarily immature — much more immature than most girls of that age — as to feeling. It was really the brain that was alive.’ (p. 508)

ここには ‘clever’ と賞賛される Marcella の、知識（社会主義）にばかり自惚れて他人の気持を忘れた欠陥、Jane Austen 以来の知性と感性の両者を合わせ持つ理想に対し、Marcella の未熟が示されている。そしてこの批判から作者 Mrs. Ward は Lord Maxwell や Aldous と同じく個人的感情に走らず、成熟した本当の感情、知性に基づいた大きな人道主義に導びかれ、おだやかな社会主義を推し進めるべきで、たとえ密猟に関する法が不十分であってもその法を守っていこうとする態度であるとわかる。法律に対しては信仰に対するような従順の気持をもつ Aldous の次のような態度こそ、Marcella の成長に必要なものである。

‘Ah, but *law* is something beyond laws or those who administer them,’ he said in a lower tone; ‘and the law — the

obligation-sense — of our own race and time, however imperfect it may be, is sacred, not because it has been imposed upon us from without, but because it has grown up to what it is, out of our own best life — ours, yet not ours — the best proof we have, when we look back at it in the large, when we feel its work in ourselves of some diviner power than our own will — our best clue to what that power may be!’ (pp. 250—260)

次に密猟の逸話は社会改革を訴え劇的であると同時に作品に深い象徴的意味を与えていることに注目したい。すなわち密猟事件はヒロインの人生の転機に重要な影響を与え、ヒロインの恋と結婚は密猟事件を重ねあわせることで正しくその意味が読みとれるという二重構造になっている。Marcella を中心とする Aldous Raeburn と Harry Wharton の三角関係は、密猟事件の反映により意味が深まり、複雑に入り組んだ長い作品の統一感を与えることになっている。

この事件の狩猟地の持主 Lord Maxwell と密猟者 Jim Hurd の関わりは Aldous Raeburn と Harry Wharton の関係と対応しており、ヒロイン Marcella は Aldous の婚約者として Maxwell 家の禁猟区にある獲物の pheasant の如く Harry Wharton の犯すべからざるものである。

Maxwell 家の相続人 Aldous の恩義をうけ劣等感から対抗意識と憎しみを持つ Wharton は Aldous が Marcella と婚約したその瞬間に登場して以来、彼女を Aldous から奪おうとする。Wharton が Marcella にキスをする事件はまさに密猟殺人事件の晩におこり、それが契機となって Marcella は Aldous との婚約を破棄する。しかし最後に Marcella は Wharton の求婚を拒絶し再び正当な所有者たる Aldous のもとに戻り結婚することで物語が終る。Wharton はあくまで一時的に密猟したのにすぎなかったのである。この対応を読みとると、Marcella の言う「Jim Hurd は罰されるべきではない」という主張は正しいのかという疑問に自づと解答が見出される。

Jim Hurd が Lord Maxwell に仕事を与えられ飢えから救われたという

恩義をうけながら、Lord Maxwell の獲物を密猟したのと同じように Wharton は Aldous の game をいわば密猟する。Tory 派の Maxwell 家の指名候補 Dodgson に対抗して West Brookshire から出馬するのを決めたのもかつて恩義をうけた Aldous への対抗からであった。保守の地盤 West Brookshire を Liberal 急進派の Wharton が荒らし奪ったことは Maxwell 家には侮辱であったが、Marcella が Aldous の婚約者である故に Marcella を誘惑する Wharton は、さらに大きな無礼をはたらいている。婚約した婦人に距離をおき、尊重するのが当然の礼儀作法であるのに、Marcella の家の滞在客という利点を悪用して、Wharton はキスを奪い、Marcella の心を Aldous からひき離すというヴィクトリア朝紳士の規範を犯す。又、country house に滞在中にその家の娘の婚約をこわすというのは招いてくれた Marcella の父の hospitality に対する礼儀に欠けるといふことにも何ら頓着しない。しかも Marcella は初め明らかに Wharton を遠ざけようとしているのである。

She seemed to be on the verge of offence with him too, half the time, which was stimulating. She would have liked, he thought, to play the great lady with him already, as Aldous Raeburn's betrothed. But he had so far managed to keep her off that plane — and intended to go on doing so. (p. 164)

Wharton はいわば密猟である故に Marcella への接近に刺激を感じ Marcella に急進社会主義を教え、それにより彼女に Aldous への反抗、敵意を燃えあがらせるが、自分の誘惑を密猟のイメージで語っている。

Wharton was perfectly well aware by now that he was trespassing on Aldous Raeburn's preserves in ways far more important, and infinitely more irritating! (p. 201)

ここで Wharton がはっきりと Marcella を犯すべからざる禁猟区にある獲物としてとらえていることが明らかである。又、保守党の Maxwell の選挙区で演説する Wharton を、牧師の妹 Mary Harden は 'I dare say

he will make his stealing sound very pretty.’ (p.179) と皮肉に言い、ここでも Wharton が盗みを働いているという暗示がほのめかされているのである。

密猟が悪いこととは知りながらやめられない Hurd と同じく、婚約者を盗むのが悪いと百も承知で Marcella に影響力をふるおうと企てる。Aldous にその力を知らせるために自分が愛してもいないのに 恋の偽装により Marcella に Wharton を恋していると思こませる。その自分の影響力に Wharton は夢中になる。キスの直後の激情のさなかにも ‘I began as an actor, did I finish as a man?’ (225) と演技だったと言い、その後平然と演説の原稿を書く。Harry Wharton は演技する人として常に描かれ、この作品での演技は真実に対して偽りという否定的な意味を持つ。

又、この事件が月夜に起ることも重要である。書斎の窓から Harry Wharton と真夜中の月明りの中に密猟者の姿を見る Marcella は Hurd が自分との約束にもかかわらず密猟しているのを知りショックを受ける。Aldous との婚約発表舞踏会の疲れと、Wharton との別れが明日ということで感情的になった Marcella は気を失ない Wharton に抱き止められてキスされる。Marcella が怒り、逃げだした後で Wharton は銃の音を聞くが、これがもちろん Westall を Hurd が殺した銃の音である。Aldous はこの時点で Marcella を失ない、いわば比喩的にこの時 Aldous の婚約者 Marcella は殺されたのである。この後 Marcella は彼女自身ではなかったと何度も言及されるが、あまりに感情的で真の自己を見失っているからである。古い言い伝え通り、月夜は人の心を狂わせ一方では密猟者を他方では Marcella と Wharton に我を忘れさせる。この月夜の事件は重要な plot 上の転機点である。もっとも初めて Hurd の密猟している様が語られるのも月夜であったし、Raeburn と Marcella の再会も月夜だった。月夜の再会を経て Aldous への恋に気づく Marcella が描かれるのは、月夜が単に人の心を狂わす以外に、Hurd の密猟へすすむ心理描写の背景として、又 Marcella の成長段階における自己葛藤のきっかけの背景として、密猟と関連して象徴的に用いられているといえる。

次に Marcella が急進社会主義を通じて Wharton に近づき、Aldous から心が離れるのと同じように、Jim Hurd は Marcella が与えた社会主義の文献を読んで、地主階級が悪いと認識し次のように考え密猟に罪の意識を持たなくなった。

He had always thought 'them rich people took advantage of yer.' But he had never supposed, somehow, they were such thieves, such mean thieves, as it appeared they were. A curious ferment filled his restless, inconsequent brain. The poor were downtrodden, but they were coming to their rights. The land and its creatures were for the people! not for the idle rich.

(p. 131)

Marcella はもともと社会主義を信奉する故に²⁶⁾ Wharton の急進社会主義に毒され、Wharton 自身を賞賛すべきと思うようになる。Marcella の Wharton への迷いも、Hurd の密猟への意識変革も社会主義が導いたとなると、社会主義自体が否定的な役割をになっているわけで、ここには主題にもかかわらずヴィクトリア朝的保守主義の作者の立場が暗示されているといえよう。

Hurd が密猟に伴う夜の匂い、ピーンとした鋭い夜気 (p.131)、そういう感覚的なものが歓喜を呼び起すというように、同じく Marcella も感覚的なもので Wharton に魅きつけられる。Wharton の Liberal としての選挙演説の時 'herself exulting in his power of tyranny' (198) と感じ、演説後、'You (=Wharton) roused me.' (p.200) と Marcella は語るが、この言葉は真実の宗教的信仰からではなく、福音主義運動の説教師が、熱烈な説教で 'rouse' させ、改宗させる連想がある。又、'a slight sound, a current of air'(142) で Wharton の気配を気づき初めて彼を意識することになり、暖炉の火が燃えついた Marcella のスカートの火を消そうとして火傷した Wharton の指を手当していて 'close contact' (p.166) が Marcella を興奮させる。そしてキスにより Wharton を恋していると思ひこむのである。

感情が未熟な Marcella に対し, Harry Wharton は演技によって密猟を犯しているのであって, 人の感情を動かし, 感覚を目覚めさせるのも演技にすぎない。又その結果の道徳的責任も一向に感じないことをキスのあと, 'Is not life enriched thereby beyond robbery?' (p.225) という盗みを賞賛する態度で明らかにする。真実を無視し, いつも偽りの 'mask' (p. 313) をかぶっている, 欺瞞にみちた Wharton の性格は賄賂事件の頂点にまで除々に明らかにされるが, 最大の罪は, 民衆の代弁者たる労働党の党首を目指しているというのに, 大衆を信じないことで, それは Clarion 紙の売れ行きの悪い理由を考えている時明らかになる。

Or was it simply that, as Wharton put it to himself in moments of rage and despondency, the majority of working men 'are either sots or blockheads, and will read and support *nothing* but the low racing or police-court news, which is all their intelligences deserve? Few people had at the bottom of their souls a more scornful distrust of the 'masses' than the man whose one ambition at the present moment was to be the accepted leader of English labour. (p. 334)

こういう Wharton の民衆侮蔑に対し, 地主として誠実に農民のことを考え, 不平等をなくそうとする Aldous の態度こそ作者の是認するものである。

Few men believed less happily in democracy than Aldous Raeburn; on the other hand, few men felt a more steady distaste for certain kinds of inequality. (p. 418)

いつも the right side (p.311) にいたいという Wharton の言葉でも信念を持たぬ日和見主義であることが知れるが, 彼は職業に対しても真剣ではない。まず Marcella の尊敬をかちとった Hurd の弁護にしても, どうせ絞首刑になるが, 密猟が話題の事件だけに弁護するのは public interest (p.248) のためによいと宣伝として利用を考え, もう一つは Marcella を奪

い Aldous を苦しめたいという個人的感情に支配されての事である。次に Clarion 紙の主宰として Midland のストライキを応援するのも、Wilkins への意趣返しと、当のストライキ相手の資本家の息子 Denny 議員に対する個人的憎しみからで（p.330）、真に労働者を応援しているのではない。心から労働者のために思い、信念から支援するのでなく、自分の名声のために新聞を利用しているだけなので、賄賂にも応ずることになる。このように Wharton の社会主義、仕事に対する気持は、成功や目的を得るために演じている役割にすぎず、使命感もなければ、真の信奉もない。そこで労働党党首の道が、賄賂事件の露見によって断たれた時、すぐに保守党の大物の娘 Lady Selina と婚約し、保守黨員となるということに、その政治理念にまで節操のないことが示されることになる。その上 Lady Selina の求婚は Marcella に結婚を拒否されたその足での訪問でなされたことも明らかにされ、愛に関しても Wharton に誠実がないとわかる。

この Harry Wharton の不誠実さに、ロンドンでの看護婦生活の中で気づいた Marcella は、それに対照的な Aldous の誠実な愛をあらためて認識し、Aldous のもとに戻り、二人が結ばれるところで物語は終る。つまり Marcella は一たん密猟されたものの、Aldous の価値を認識し再生するのである。

結　　び

この作品は何よりも、しいたげられた Hurd に共感を持ち、彼を信じ、彼のために助命を請う Marcella の熱情が感動を呼び、狩猟法廃止を訴えることで、ヴィクトリア朝人の地主階級への意識の変化を促す画期的なものである。

Hurd の悲惨な状況は、歴史的事実を立証するもので、農政の不手際という根本的原因により地主階級が責められるべきと教えるし、また労賃の安さ、住居の窮状それによる Hurd の子供の不健康、病死は直接的には地主の Marcella の父 Mr. Boyce の責任だが、これも長く支配者としてイギリスを動かしてきた地主階級の怠慢からと主張し、地主の変革をせまるも

のである。その上に、地主の楽しみのための禁猟地が存在し、飢えた農民が密猟した時、地主階級からなる判事が特権を犯されたと厳しく罰する狩猟法は、農民に対する残酷以外のなにものでもない。年収100ポンド以下は猟をできないという禁止、密猟の刑罰は初回で3ヶ月という地主側から定められた法律の不公平に気づき、地主の娘ながら、この不合理を指摘し、読者に新しい視点を示し Hurd を助けようと真剣に努力する Marcella の姿は感動的である。この事件で地主階級に法に、社会に怒りを向ける Marcella は偏見なく理想主義を求め、真の社会主義を実現したいと考える、勇気ある予言者的なヒロインである。さらに中流読者が共感を持ちうるように労働者階級にしては知的な Hurd と上品な Hurd 夫人という設定もヒロインと同様社会改革の訴えとして巧みである。

しかし密猟事件が、恋の三角関係に投影されることを考慮する時、作者の意図は単なる狩猟廃止法の訴えだけと思えない。

Aldous の婚約者 Marcella が Harry Wharton に密猟されるというプロット上の類似は、さらに三つの特徴、月夜、感覚的興奮、誤った社会主義の教育が Marcella と Hurd の二人を誤ちへと走らせたことを示す。

この密猟のもつ二重の意味から Harry Wharton の墮落を追っていくと、Harry Wharton の演技する特性が明らかである。恋に対しても政治にも誠実でなく、偽りの仮面により人を魅きつけ欺き、急進社会主義という頭脳によって人々の感情を動かす悪人性が Marcella を密猟したのである。Marcella は Hurd の助命に関し、感情過多で法を守る正しい理性的判断ができず誤ちを犯すが、一方では急進社会主義という頭脳の働きにより人を感情的に動かすだけで真実の愛のない Wharton が描かれる。つまり Marcella 同様 Harry Wharton も感情と理性の総合の理想故、批判されている。

Harry Wharton がこのように cleverness だけの悪人と理解された結果、対応する密猟者 Jim Hurd は、Marcella の熱烈な弁護にもかかわらずその密猟、殺人は罪として罰されるべきという作者の態度が明らかになる。Aldous の主張通り法律を信仰と同じように神への敬虔さで守ってい

きたいという作者の姿勢をここに読みとらざるを得ない。感動的な狩猟法廃止の訴えだが、しかし作者は本質的にはイギリス上流地主階級を信じ、一般的には法律を是認する態度なのだと解釈できるといえる。

もし作者が、狩猟法廃止をきっかけに、上流地主階級批判、地主階級廃止という民主主義的理想をあくまで主張するのならば、Marcella のヒステリックなまでの抗議によってではなく、理性的な Marcella の姿によって納得させることもできたはずである。又は、Hurd の正当防衛の圧倒的証明により虐げられた貧しい人の正しさを主張することもできたのである。

善なる Hurd の誤った法による誤った処刑という描き方なら、完全な法批判、体制批判となる。しかし作者は密猟においやられる農民の姿、狩猟法にみられる不公平な地主階級の特権と、それにより裁かれる農民の哀れさを明らかにするだけで、狩猟法存続には反対であるが、決して地主の支配する体制を完全に否定しているのではない。地主階級は Aldous や Lord Maxwell のように権利と同様に義務を果し、賢明なる領主として農民を守り、批判をはねかえし、英国の将来を作っていくべきと主張している。ここに明らかに Aldous の親友 Hallin の主張する、穏やかな社会主義、変化はなければならないが、賢明な地主の手によって行われねばならないという理想がみられる。

しかし、地主階級によりやっと完成されたところである「法律」というものを批判する Marcella の勇気、地主の娘としての安穩な昔ながらの慈善のみに満足せず、理想主義に燃え、熱情的に Hurd の助命請願に努力する Marcella はその法律批判により、ヴィクトリア朝の、いやイギリス人社会の屋体骨を考えなおそうとする新しい視点を示す人として注目すべきである。この社会主義に信奉して体制批判をするヒロインという主題は、1890年代においてさえ全く新しいものであった。同じく人道主義的立場から社会改良を訴える点で Mrs. Gaskell の *North and South* のヒロイン Margaret Hale との類似がみられるが、しかし Margaret は慈善的思想から労働者 Higgins や娘 Bessy と友人になり、彼らの苦しい生活に同情を

示しはするが、いよいよ労働者達が資本家 Thornton に対し暴動を起こす時多数の暴徒・労働者達から一人の紳士、Thornton を守ろうとする。つまり彼女は中流階級の自分の立場を否定してはいないし、そこから離れてもいない。それに対し Marcella は Venturist として社会主義を学び、Harry Wharton に急進思想を教えられ、最後に看護婦として学び、働く生活の中から自分の基盤たる上流地主社会を攻撃するという勇敢さを示す。Mrs. Gaskell の *North and South* から約 40 年の隔りという時代の変化もあるが、lady としての moral により判断し成長していく Margaret に比べ、Marcella は思想的、職業的教育によって影響を受け、成長し、主義により行動する女性として描かれる。

Marcella の狩猟法に対する非難、Hurd の密猟への弁護は、Marcella の気高い人道主義的立場を示し、歴史的事実をもとに見通せる現代読者にとっては当然納得できるものである。作者は 1890 年代にあって法と地主階級を信じる立場にあるが、しかし知的エリートとして地主階級と被支配者である農民達の関係の長期にわたる不均衡の矯正を予期せざるを得なかった。そこでヒロインに社会主義を信奉させ、30 年先の変化をヒロインの理想の表明により示しているのである。しかし 30 年早すぎたために、信仰を捨て、革命を主張するという過度な急進主義として Marcella の誤ちが指摘される。この理想に走るあまり、誤ちを犯すという点で Marcella は *Middlemarch* の Dorothea の系譜にあるが、しかし自己犠牲により道徳的勝利を得るしかなかったヴィクトリア朝ヒロインの常を脱けだしている。思想的立場と、実践的活動という強さで、Marcella は犠牲者となるのを免れている。

従って密猟という社会問題を扱い、これを人間関係に生かしそれぞれの性格描写に象徴的な意味をもたせるといった芸術的技巧という両面を持つことでこの作品は魅力あるものとなっている。そしていかにもヴィクトリア朝的地主の娘でありながら、現代的視点を持ち Hurd を弁護する気高い人間愛にみちた Marcella によって、ヴィクトリア朝の最後を飾る作品として *Marulla* は評価されるべきであろう。

〔註〕

- 1) Tamie Waters, 'Introduction' to *Marcella* (Virago Press Ltd, 1984) p. ix
- 2) Vineta Colby, *The Singular Anomaly: Women Novelists of the Nineteenth Century* (New York University Press, 1970) p. 168
- 3) Ibid, pp. 111-2 Arnold 家はもちろん詩人, 芸術家, 教育家を生みだしているが, それだけでなく, Arnold 達は多く知的, 教育活動に関係する人々と結婚している。Mrs. Ward の伯母 Jane Arnold は 1870 年 Education Bill (小学校教育の法案) を提案した政治家の W.E. Forster と, Mrs. Ward の妹 Julia Arnold は Leonard Huxley と結婚, (二人の間の子供, 小説家 Aldous Huxley の名が *Marcella* のヒロインの恋人に使われている) Mrs. Ward の娘 Janet Ward は Oxford の歴史教授 G.M. Trevelyan と結婚, Mrs. Ward 自身の夫も後に Times 紙の論説家, 美術評論家となるが, 結婚当時は Oxford の tutor であった。
- 4) Ibid, p. 112
- 5) Ibid, p. 113
- 6) Mrs. Ward は 1893 年に Beatrice Potter (まもなく Sidney Webb 夫人となった) と共に Passmore Edwards Settlement を計画し, 初めは貧しい人々に宗教教育をとという趣旨であったが, 1897 年に実際開かれてからは社会福祉の色彩が濃くなり, 昼間働いている母親の子供達を教育し, 夜間は成人を対象にすることになった。なかでも Mrs. Ward の業績は身体障害や病身の子供達のための教育を考えたことである。やっと小学校普通教育が始ったばかりで, 彼らはなおざりにされていたのである。
- 7) Peter J. Keating, *The Working Classes in Victorian Fiction* (London, Routledge & Kegan Paul, 1971) pp. 1-30
- 8) Esther Marian Greenwell Smith, *Mrs. Humphry Ward* (Twayne's English Authors Series: Twayne Publishers, 1980) pp. 30-141
- 9) Tamie Waters, *ibid*, p. vii
- 10) Lawrence Stone and Jeanne C. Fawtier Stone, *An Open Elite? England 1540-1880* (Oxford University Press, 1984) pp. 30-32 著者によれば, 700 年以上もの驚くべき長期, 権力を持ち続けた英国上流地主階級は 1880 年代において次の諸点の理由から権力の座から滑り落ち始めたとわかる。
 1. 1886 年の総選挙により地主階級出身の国会議員が下院において工業, 商業出身議員に数の上で初めて劣勢となった。
 2. 1888 年これまで地主階級によって行われていた地方政治に代って County Councils の確立
 3. 1882 年の the Settled Land Act により (農地改革), 地主階級の経済的優位が初めて侵害された。

4.1873年の農業大恐慌による地主の被害。さらに所得税、相続税、第1次世界大戦の大破壊による経済的危機の追いうちにより1925年までに多くの著名上流地主階級は消滅した。

11) Esther M. G. Smith, *ibid*, p. 60

12) Mrs. Humphry Ward, *Marcella* (1894) (Smith, Elder and Co. 1894: Virago edition offset from Smith, Elder and Co. 1903 edition, 1984) p. 243 以下本文の引用はこの版によりページ数のみで示す。

13) G. M. Trevelyan, *Illustrated English Social History*: 4 (Penguin Books Ltd, 1968; First published in Longmans 1942) p. 174

14) Lawrence Stone (*ibid*) p. 50 によれば、1873年3000エーカー以上所有の地主を大地主といえるが、彼らは全 England の70%の土地を所有していた。同じく p. 62 において1873年の地主は3000エーカーで3000ポンドの地代収入をあげた。ということなので Lord Maxwell は相当な大地主であり Boyce もかなりのところまで持ちなおしたと言える。

15) Jo McMurty, *Victorian Life and Victorian Fiction: A Companion for the American Reader* (Archon Books, 1979) p. 47 なお「一九世紀のヨーロッパ」によれば概算で貴族階級は年収10,000ポンド以上、中流は150～1,000ポンド、熟練労働者は50～80ポンドであった。p. 79 野田昌雄編西洋史(9)(有斐閣, 1980) 'ヴィクトリア朝期の政治と社会' 村岡健次

16) G. M. Trevelyan, *ibid*, p. 193 しかし Bessant の目指した下層階級は関心がなく、1890年代になってやっと、中流階級、専門職階級の子供が減少という効果を生じた。

17) *Ibid*, pp. 172-3 土地を持たぬので農民の方は伝統的に土地を去ることに慣れていて、安易に村を去り、耕地面積が不況の間どんどん減少した。

18) *Ibid*, p. 216

19) 農業不況は、1875～84年の第1次と、1891～99年の第2次と2回起ったが、本文中の選挙で小作農が選挙権を持ち、(1884年, the new Franchise Bill) その後の最初の選挙(1885)らしく、Harry Wharton が小作農たちに選挙演説の中で投票の仕方を説明している。(*Marcella* p. 199) これらの事情から作品は Book I. II が1884～5年当時で、第1次農業不況時と思われる。

20) 農業保護の立場から自由貿易反対を唱えたディズレーリが30年後首相になった時、彼の理論どおり、アメリカの大規模農業に競合できず、穀物中心の英国農業は衰退した。さらに1880年代に始った冷凍肉輸入も自給自足から消費経済へと農民につらいものとなった。しかし国内では相変わらず、自由貿易こそ英国繁栄の秘密と主張された。この結果、1884年の土地自由化、農民の投票権にもかかわらず、農民は都会へ流出するか、Hurd のようになるしかなかった。(G. M. Trevelyan *ibid* pp. 171～175 参考)

- 21) Jo Mc Murty, ibid, pp. 148 ～ 9
- 22) Lawrence Stone, ibid, p. 14
- 23) Jo McMurty, ibid, pp. 148 密猟の罰は3 ヶ月から, 7 年の禁固刑という厳しいものであった。
- 24) *Marcella*, p. 39 妻 Minta も, 子供も肺病。Ibid, p. 302 Hurd の一人息子 Willie はこの住居環境と貧困から, 病に苦しみ続けて, Jim Hurd の処刑の朝, 息をひきとる。
- 25) Jo McMurty, ibid, pp. 148 密猟の罰は初回なら3 ヶ月の禁固刑であった。
- 26) *Marcella* はロンドンで芸術を学ぶボヘミアン生活の中で Venturist Society（ファビアン協会）の人々とつきあい, その社会主義に従って East End で奉仕的宣伝活動をしていた。*Marcella* (pp. 16 ～ 17)